



















日かならず来るので、餅屋の者もすこしく疑って、あるときそつとその跡をつけて行くと、女の姿は廟のあたりで消え失せた。いよいよ不審に思つて、その次の日に来た時、なにげなく世間話などをしてしているうちに、隙すきをみて彼女の裾に紅い糸を縫いつけて置いて、帰る時に再びそのあとを付けてゆくと、女は追つて来る者のあるのを覺つたらしく、いつの間にか姿を消して、糸は草むらの塚の上にかかつていた。

近所で聞きあわせて、塚のぬしの夫へ知らせてやると、夫をはじめ、一家の者が駈け付けて、試みに塚をほり返すと、赤児は棺のなかに生きていた。女の顔色もなお生けるが如くで、妊娠中の胎児が死後に生み出されたものと判つた。

夫の家では妻の亡骸なきがらを灰にして、その赤児を養育した。

## 海中の紅旗

丞相じょうしょう（大臣）の趙鼎ちやうていが遠く流されて朱崖しゆがいにあるとき、桂林けいりんの帥そつが使いをつかわして酒や米を贈らせた。雷州らいしゅうから船路をゆくこと三日、風力がすこぶる強いので、帆を十分に張つて走らせると、洪濤おほなみのあいだに紅い旗のようなものが続いてみえた。

距離が遠いのでよく判らないが、あるいは海賊か、あるいは異国の兵かと、舟びとを呼んでたずねると、かれらは手をふつて、なんにも言うなど制した。見れば、その顔色が甚だおだやかでない。

どうした事かと疑い惑つてしていると、舟びとの一人はやがて髪をふり乱して刀を持って、篷のうしろに出たかと思うと、自分の舌を傷つけてその血を海のなかへしたたらした。

「口を利用してはいけません。眼を瞑じておいでなさい」と、舟びとは注意した。

その通りにしていると、ふた時ほど過ぎた後に、舟びとらはたちまち喜びの声をあげた。

「御安心なさい。みんな助かりました」

なにが何だかちつとも判らないので、使いは舟びとにその子細をただすと、かれらは初めて説明した。

「けさから見たのは鱒魚の大きいので、紅い旗のように見えたのは、その鱗や脊鰭でございます。あの魚とこの舟とは十五里も距れているのですが、もしあの魚がからだを一度ゆすぶつたら、こんな舟は木の葉のようにくつがえされてしまいます。あの魚は北へのぼり、この舟は南へくだり、たがいに行き違いになりながら、この強い風に幾時間を費した

のですから、おそろくかの魚の長さは幾百里というのでございましょう。考えても怖ろしいことではございませぬ」

莊子のいわゆる鯤鵬の説も、必ずしも寓言ではないと、使いはさとつた。

### 厲鬼の訴訟

秦隸が宣州の知事となつてゐる時である。某村の民家で酒を密造してゐるのを知つて、巡検をつかわして召捕らせた。

巡検は数十人の兵を率いて、夜半にその家を取り囲むと、それは村内に知られた富豪であるので、夜なかに多勢が押し寄せて来たのを見て、賊徒の夜襲と早合点して、太鼓を鳴らして村内の者どもを呼びあつめた。その家にも大勢の奉公人があるので、かれこれ一緒に協力して、巡検その他をことごとく捕縛してしまつた。おれは役人であるといつても、激昂してゐるかれらは承知しないのである。

それが県署にもきこえたので、県の尉が早馬で駆け付けると右の始末である。何分にも夜中といい相手は多勢であるので、尉はまずいい加減にかれらをなだめた。

「よし、よし。お前の家で強盗どもを捕えたのは結構なことだ。ともかくもわたしの方へ引き渡してくれないか。おまえ達にも褒美をやるよ」

だまされるとは知らないで、かれらは縄付きの巡検らをひき渡した。その家の主人と悴と孫との三人も、その事情を訴えるために付いて行った。さて行き着くと相手の態度は俄かに變つて、知事の秦棣は巡検らの縄を解いて、あべこべにかの親子ら三人を引くつた。

「役人を縛つて、強盗呼ばわりをするとは不届きな奴らだ」

かれらはからだ全体を麻縄で嚴重にくくり上げられて、いずれも一百ずつ打たれた。縄を解くと、三人はみな息が絶えていた。それはあまりに苛酷の仕置きであるという批難もあつたが、秦棣の兄は宰相であるので、誰も表向きに咎める者はなかつた。但し秦棣はその明くる年に突然病死した。

そのあとへ楊厚という人が赴任した。ある日、楊が役所に出ていると、数人の者が手枷や首枷をかけた一人の囚人をつれて来て、なにがし村の一件の御吟味をおねがい申すといつて消え失せた。

白昼にこの不思議を見せられて、楊もおどろいた。殊に新任早々で、在来のことをなん

にも知らないので、下役人を呼んで取調べると、それはかの村民らを杖殺した一件であることが判った。首枷の囚人は秦棣であるらしい。

楊は書き役の者に命じて、かの一件の記録を訂正させ、さらに紙銭しせん十方を焚やいて、かれらの冥福を祈った。

### 鉄塔神の靈異

蔚州うつの城内に寺があつて、その寺内に鉄塔神てつとうじんというのが祭られているが、その神靈か赫く灼くたるものとして土地の人びとにも甚だ尊崇きつたんされていた。契丹きつたんのまさに亡びんとする時、或る者はその神体が城外へ走るのを見て、おどろき怪しんで早速に参詣すると、神像の全身に汗が流れていたもので、いよいよそれを怪しんだが、さてその子細はわからなかつた。

その夜の夢に、神は寺の講師こうじに告げた。

「われは天符を受取つて、それに因るとこの城中の者はみな死すべきである。それは余りにいたましいので、われは毎日奔走尽力して、出来得るだけの人命を救うことにした。明

日の午<sup>ひる</sup>どきに女<sup>じよしん</sup>真の兵が突然に襲つて来て、この城は落ちる。そうして、逃がるまじき命数の者一千三百余人だけは命を失わなければならない。そのうちにはこの寺の僧四十余人も数えられている。あなたもその一人であるが、われは久しくこの地にあつて、ふだんから師の高徳に感じているのであるから、死者の名簿を改訂して他人の名に換えて置いた。就いては、明日早朝にここを立ち退くがよろしい」

講師は夢が醒めて奇異に感じた。それを他の僧らに話したが、誰も信じる者がないので、講師も一時はやや躊躇したが、鉄塔神の霊あることはかねて知っているので、とうとう思い切つて自分だけの荷物を取りまとめて、寺のうしろの山へ逃げ登った。

行くこと五里ばかりにして、講師は白金の食器を置き忘れたことを思い出したので、ふたたび下山して寺へ引つ返すと、あたかも檀家で供養をたのみに来ている者があつた。他の僧らは講師の顔をみて喜んだ。

「あなたのような偉いかたが軽々しく夢を信ずるといふことがありますか。こうして檀家の方々も見えているのに、和尚のあなたが、子細もなしに寺を捨てて立ち去つたなどあつては、世間の信仰をうしなつてしまいます。今は国<sup>こ</sup>ぎ<sup>か</sup>いも平穩で、女<sup>じよしん</sup>真のえびすなごが押し寄せて来るといふ警報もないのに、一刻を争つて立ち退くには及びますまい」

かれらの言うことに道理もあるので、講師はころならずもひき留められて、かれらと共に供養の式を営み、あわせて法談を試むることになった。法談が終って、衆僧がみな午ひるめし飯を食いはじめると、たちまちに女真の兵がにわかには押し寄せて来たという警報を受取った。もちろん不意のことであるから、城はいっ時の後に攻め破られた。僧らもあわてて逃げ惑ったが、もう遅かった。城中の人と寺中の僧と、死んだ者の数はかの神の告げに符合していた。講師も身を全うすることが出来なかった。

## 乞食の茶

都の石氏せきしという家では茶肆ちやみせを開いて、幼い娘に店番をさせていた。

ある時、その店へ気ががいのような乞食が来た。垢あかだらけの顔をして、身には襤褸ぼろをまとっているのである。彼は茶を飲ませてくれと言うと、娘はころよく茶をすすめた。しかもその貧しいのを憫れんで銭ぜにを取らなかつた。その以来、かの乞食は毎日ここへ茶を飲みに来ると、娘は特に佳い茶をこしらえてやった。

それがひと月もつづいたので、父もそれを知って娘を叱った。

「あんな奴が毎日来ると、ほかの客の邪魔になる。今度来たら追い出してしまえ」

それでも娘はやはり今までの通りになっているので、父はいよいよ怒って彼女を打つこともあつた。そのうちに、かの乞食が来て、いつものように茶を飲みながら娘に言った。

「お前はわたしの飲みかけの茶を飲むか」

これには娘もすこし困って、その茶碗の茶を土にこぼすと、たちまち一種不思議のよい匂いがしたので、彼女は怪しんでその残りを飲みほした。

「わたしは呂翁りよおうという者だ」と、乞食は言った。「おまえは縁がなくて、わたしの茶をみんな飲まなかつたが、少し飲んでも福はある。富貴か、長寿か、おまえの望むところを言ってみろ」

娘は小商人こあきんどの子に生まれ、しかもまだ小娘であるので、富貴などということとはよく知らなかつた。そこで、彼女は長寿を望むと答えると、乞食はうなずいて立ち去つた。親たちもそれを聞いて今更のように驚いたが、乞食はもう再び姿をみせなかつた。

娘は生長して管営指揮使の妻となり、のちに呉ごの燕王えんおうの孫娘の乳母となつて、百二十歳の寿を保つた。



## 小龍

宗立本は登州黄巢の人で、父祖の代から行商を営んでいたが、年の長けるまで子になかった。宋の紹興二十八年の夏、帛のたぐいを売りながら、妻と共に州を廻つて、これから昌樂へ行こうとする途中、日が暮れて路ばたの古い廟に宿った。数人の従者は柝を撃つて、夜もすがらその荷物を守っていた。

夜があけて出発すると、六、七歳の男の児が来てその前にひざまずいた。見るから利口そうな小児である。宗は立ちどまつて、お前はどこの子かとたずねると、彼ははきはきと答えた。

「わたくしは武昌の公吏の子で、父は王忠彦と申しました。運悪く両親に死に別れて、他人の手に育てられていましたが、ここへ来る途中で捨てられました」

宗は憐れんで彼を養うことにして、その名を神授と呼ばせた。神授は見た通りの賢い生まれつきで、書物を読めばすぐに記憶するばかりか、大きい筆を握つてよく大字をかけた。篆書でも隸書でも草書でも、学ばずして見事に書くので、見る人みな驚嘆せざるはなかつた。宗はもとより大資本の商人でもないのです、しまいには自分の商売をやめて、

神授を連れて諸方を遊歴し、その字を売り物にして生活するようになった。

それからのち二年の春、宗は小児を連れて濟南さいなんの章丘しょうきゅうへゆくと、路で胡服こふくをきた一人の僧に逢った。僧は容貌魁偉ようぼうかいいともいうべき人で、宗にむかつて突然に訊いた。

「おまえはこの子をどこから拾つて来た」

「これはわたしの実の子です」と、宗は答えた。「飛んでもないことをお言いなさるな」

「いや、おまえの子ではない筈だ」と、僧は笑いながら言った。「これは私の住んでいる五台山りゅうの龍りゅうだ。五百の小龍のうちで其の一つが行くえ不明になったので、三年前から探していたのだ。お前の手もとに長くとどめて置くと、きっと大いなる禍いを受けることになる。わたしが法を施したから、かれももうどうすることも出来まい」

僧は水を索もとめて噴きかけると、神授はたちまち小さい朱あかい蛇あかに変わった。僧は瓶かめをとつて神授の名を呼ぶと、蛇は躍つてその瓶のうちにはいった。呆れている宗の夫婦をあとに見て、僧は笠を深くして立ち去った。

## 蛇薬

徽州懐金郷の程彬という農民は、一種の毒薬を作つて暴利をむさぼっていた。

それはたくさんの蛇を殺して土中にうずめ、それに苦とまをかけて、常に水をそそいでいると、毒気が蒸れてそこに怪しい蕈きのこが生える。それを乾かして、さらに他の薬をませ合わせるのである。しかし最初に生えた蕈は、その毒があまりに猛烈で、食べばすぐに死んでしまふので、後日の面倒を恐れて用いず、多くは二度目に生えたのを用いて、徐々に斃たおれさせるのであつた。

その毒をためすには、蛙かわずに食わせてみるのである。蛙が多く躍り狂えば、その毒の効き目が多いということになつている。その薬の名は万歳丹まんざいたんと称していたが、万歳どころか、実は人の命をちぢめる大毒薬で、何かの復讐などを企てるものは、大金を与えてその秘薬を買つた。現に或る家では来客にその薬をすすめようとして、誤まって嫁の舅しゅうとに食わせたので、驚いていろいろに介抱したが、どうしても救うことが出来なかつたという話も伝わっている。

程の弟に正道せいどうという者があつた。その名のごとく彼は正しい人間であつたので、兄の非行を見るに見かねて、数十里の遠いところへ立ち退いてしまった。程もだんだん老ゆるにしたがつて、自分の非を悔むようになったので、本当の薬を作ることをやめて、その偽

物を売りはじめたが、偽物では効き目がないので、自然に買う者もなくなった。彼は貧窮のうちに晩年を送って、ひとり息子は乞食になった。

彼がほん物の万歳丹を作っている時のことである。村役人が租税そぜいを催促に行つて、なにか彼の感情を害すようなことを言ったので、程はあざむいてかの薬を飲ませると、役人は帰る途中から俄かに頭が痛んで血を嘔はいた。さてはと気がついて引返して、程の門前に仆たおれて救いを呼ぶと、彼は水を汲んで来て飲ませてくれた。それで苦痛も薄らいで、役人は無事に助かったということであるから、彼は毒を作ると共に、その毒を消す法をも知っていたらしいが、その法は伝わっていない。

### 重要書類紛失

宋の紹興の初年、甫田ほでんの林迪功りんちゆうこうという人は江西の尉じょうを勤めていたが、盗賊を捉えた功によつて、満期の後は更に都の官吏にのぼせられることになつていた。

そのころ臨安府には火災が多かったので、官舎に寄寓きんぐうしている人びとは、外出することに勅諭ちよくゆその他の重要書類を携帯してゆくのを例としていた。林りんも御用大事と心得ている

人物であるので、外出する時には必ず重要書類を懐中して出て、途中でも二、三度ぐらいは検めるあつたことにしていた。

それで最初は無事であつたが、ある時それが紛失したので、彼は三万銭の賞を賭けてその捜査を命じると、たちまちにそれを届けて来るものがあつた。それで安心すると、又もや紛失した。又もや賞をかけると、又もや直ぐに届けて来た。こういうことが三度も四度も繰り返されたので、本人も怪しみ、他の者も不審をいまくようになつた。これが果てしもなくしに続くときは、彼の私財が尽きてしまうか、あるいは重要書類をうしなつた罪に服するか、二つに一つは免まぬかれまいであらうと危あやぶまれた。

林は独身者であるが、近來その部屋のなかで頻しきりに人声を聞くことがあつた。殊に或る夜は何か声こゝろ高たかに論じ合つてゐるようであつたが、暫くしてひっそりと鎮まつた。あくる朝になつても戸もあけないので、出入りの婆さんが不思議に思つて、近所の人びとを呼びあつめ、壁をぶちこわしてはいつてみると、林は腰掛けの上にたおれてゐた。かれは剪刀はさみで喉を突いて自殺したのである。

さてその死因はわからなかつた。伝うるところに拠れば、彼がさきに盗賊二人を捕えた時、いずれもその証拠不十分であるにも拘かわらず、彼は自己の功をなすに急なる余りに、鍛

鍊羅織らしきして無理にかれらを罪人におとし入れた。その恨みが重要書類の紛失となり、さらに彼の死となったのであろうというのである。但しそれが死んだ人の仕業しわざか、生きている人の仕業か、本人に聞いてみなければ判らないのである。

### 股を焼く

宋の宣和年中に、明州昌しょうこうく国こくの人が海あきないに出た。海上何百里、名の知れない大きい島に舟を寄せて、そのうちの数人が薪たきぎを採りに上陸すると、島びとに見つけられて早々に逃げ帰ったが、その一人は便所へ行つていたために逃げおくれ、遂にかれらの捕虜とりことなつた。

島びとは鉄の綱で彼をつないで、田を耕たがやさせた。一、二年の後には互いに馴れて、縛つて置くことを免ゆるされたが、初めのうちは島びとがあつまつて酒を飲むたびに、彼をその席へひき出して、焼けた鉄火箸を彼の股へあてるのである。かれらはその苦しみもがくのを見て、面白そうに大いに笑つた。要するに、彼に残酷な刑を加えて、酒宴の余興とするのである。

彼ものちにはそれを覺さとつたので、いかに熱い火箸をあてられても、騒がず、叫ばず、齒を食いしばってじつと我慢していたので、かれらは興を失つたらしく、ついにその拷問ごうもんをやめてしまった。

三年後、かれは幸いに、便船を得て逃げ歸つたが、その両股は一面に黒く焼かれていた。

### 三重齒

右相丞鄭雍ていようの甥の鄭某は拱州こうしゅうに住んでいた。その頃、京東けいとうは大饑饉で、四方へ流浪して行く窮民が毎日つづいてその門前を通つた。

そのなかに一人の女があつた。泥まぶれの穢きたない姿をしていたが、その容貌きりようは目立って美しいので、主人の鄭は自分の家へ引き取つて妾しやうにしようと思つた。女にも異存はなく、やがては餓死するかも知れない者を、お召仕つかいくだされれば望外の仕合わせでございませと答えた。そこで請人うけにんを立てて相当の金をわたして、女はこの家の人となつて、髪を結わせ、新しい着物に着かえさせると、彼女の容貌はいよいよ揚がってみえた。

女は美しいが上に、なかなか利口たちな質であるので、主人にも寵愛されて、無事に五、六

カ月をすごしたが、ある夜、大雷雨の最中に、寝間の外から声をかける者があつた。

「先日の婦人を返してください。あの女は餓死すべき命数になっているので、生かして置くことは出来ないのです」

鄭は内からそれに應對していたが、外にいるのは何者であるか判らない。おそらく何かの妖物であろうと思われるので、堅く拒んで入れなかつた。外の声もいつかやんだ。

しかし夜が明けてから考えると、こういう女をいつまでもとどめて置くのは、自分の家のためにもよろしくないらしい。いつそ思い切つて暇を出そうかとも思ったが、やはり未練があるのでそのままにして置くと、次の夜にも又もや門を叩いて彼女を渡せという者があつた。鄭も意地になつてそれを拒んだ。

「畜生。なんとでもいえ。女を連れて行きたければ、勝手に連れて行つてみる。おれは決して渡さないぞ」

相手は毎夜のように門を叩きに来るのを、鄭はいつも強情に罵つて追い返した。たがいに根くらべを幾日もつづけているうちに、ある夜かの女は俄かに齒が痛むと言ひ出して、夜通し唸つて苦しんでいたが、朝になつてみると、その齒が三重に生えて、さながら鬼のような形相になつたので、主人は勿論、一家内の者がみな怖れた。



こうなると、もう仕様がなない。彼女は即日きふじつに暇を出された。

何分にもこんな形になつてしまつては、誰も引き取る者もないので、彼女は遂に乞食の群れに落ちて死んだ。

### 鬼に追わる

宋の紹興しやうこう二十四年六月、江州彭沢ほうたくの丞を勤める沈持要ちんじようという人が、官命で臨江へゆく途中、湖口県ここうを去る六十里の化成寺かせいじという寺に泊まつた。

その夜、住職をたずねると、僧は彼にむかつて客室の怪を語つた。

「昨年さくねんのことでございます。ひとりのお客人が客室にお泊まりになりました。その部屋のうちには旅櫛りよしんがござりました。申すまでもなく、旅で死んだお人の棺をお預かり申していたのでござります。すると、夜なかにお客人はその棺のうちから光りを発したのを見て、不思議に思つてじつと見つめっていると、その光りのなかに人の影が動いているらしいので、お客人も驚きました。となりは仏殿であるので、さあといったらそこへ逃げ込むつもりで、寢床とぼりの帳をかかげて窺つてみると、棺のなかの鬼も蓋ふたをあげてこちらを窺つていたのでご

ざります。いよいよ堪たまらなくなつて、お客人は寢床からそつとひと足降りかかると、鬼もまた、棺の中からひと足踏み出す。ぎよつとして足を引つ込ませると、鬼もまた足を引つ込ませる。こつちが足をおろすと、鬼もまた足をふみ出すというわけで、同じようなことを幾たびも繰り返しているうちに、お客人ももうどうにもならないので、思い切つて寢床から飛び降りて逃げ出すと、鬼も棺から飛び出して追つて来る。お客人は仏殿へ逃げ込みながら、大きい声で救いを呼んでいると、鬼はもう近いところまで追い迫つて来ました。お客人は気も魂も身に添わずというわけで、ころげ廻つて逃げるうちに、力が尽きて地にたおれると、鬼はここぞと飛びかかつて来るとき、たちまち柱に突き当つて、がちりという音がしたかと思うと、それぎりひつそりと鎮まつてしまいました。そこへ大勢の僧が駆けつけて、半死半生でたおれているお客人を介抱して、さてそこらあらたを検めてみると、骸骨が柱にあたつてばらばらくずに頽れていました。

その後、その死人の家から棺をうけ取りに来ましたが、死骸が碎けているのを見て承知しません。なんでも寺じちゆうの者が棺をあばいたに相違じないといつて、とうとう訴訟沙汰にまでなりましたが、当夜の事情が判明して無事に済みました」

## 土偶

鄭安恭ていあんきやうが肇慶ちやうけいの太守となつていた時のことである。

夜番の卒そつが夜なかに城中を見まわると、城中の一つの亭ていに火のひかりの洩れているのを発見したので、怪しんでその火をたずねてゆくと、そこには十余人の男と五、六人の小児とが集まつて博奕ぼくちをしているのであつた。卒は大胆な男であるので、進み寄つて冗談半分に声をかけた。

「おい。おれにも銭ぜにをくれ」

彼が手を出すと、諸人は黙つて銭をくれた。その額は三千銭ほどであつた。夜が明けてからあらためると、それは本当の銅銭であつたので、彼は大いに喜んだ。明くる晩もやはりその通りで、彼は又もや三千あまりの銭を貰つて来た。それに味を占めて、彼は上役に巧く頼み込んで、以来は夜更けの見まわりを、自分ひとり毎晩受持つことにした。そうして、相変らず賭博者の群れからテラ銭せんのようなものを受取つていたので、彼の懐中はいよいよ膨らんだ。

そのうちに、城中の軍資を入れてある庫くらのなかから銀数百両と銭数千緡びんが紛失したこと

が発見されて、その賊の詮議が嚴重になった。かの卒は近来俄かに錢使いがあらひ上に、新しい着物などを拵こしらへたというのが目について、真つ先に捕えられて吟味を受けることになったので、彼も包み切れないで正直に白状した。太守の鄭はその賭博者の風俗や人相をくわしく取調べた後に、こう言った。

「それはまことの人ではあるまい。おそらく土偶どくわうのたぐいであろう」

そこで、かの卒を見知り人にして、他の役人らが付き添つて、近所の廟をたずね廻らせると、城じやう隍かう廟びやうのうちうちに大小の土人形がならんでいる。その顔や形がそれらしいというので、試みに一つの人形の腹を毀こわしてみると、果たして銀があらわれた。つづいて他の人形を打ち砕くと、皆その腹に銀をたくわえていた。さらに足の下の土をほり返すと、土の中からもたくさんぜいの錢ぜいが出た。

卒が貰つた錢と、掘り出した銀と錢とを合算すると、あたかも紛失の金高に符合しているので、もう疑うところはなかつた。

土人形は片つ端から打ち毀こわされた。その以来、怪しい賭博者は影をかくした。

## 野象の群れ

宋の乾道七年、縉雲の陳由義が父をたずねるために閩より広へ行つた。その途中、潮州を過ぎた時に、土人からこんな話を聞かされた。

近年のことである。惠州の太守が一家を連れて、福州から任地へ赴く途中、やはりこの潮州を通りかかると、元来このあたりには野生の象が多くて、数百頭が群れをなしている。時あたかも秋の刈り入れ時であるので、土地の農民らは象の群れに食いあらされるのを恐れて、その警戒を嚴重にし、田と田のあいだに陷阱を設けて、かれらの進入を防ぐことにしたので、象の群れは遠く眺めているばかりで、近寄ることが出来なかつた。

かれらは腹立たしそうに唸っていたが、やがて群れをなして太守の一行を取り囲んだ。一行には二百人の兵が付き添っていたが、幾百という野象に囲まれては身動きも出来ない。なんとか賺して逐いやろうとしても、かれらはなかなか立ち去らないで、一行を包围すること半日以上にも及んだので、一行ちゅうの女子供は途方にくれた。そのなかには恐怖のあまりに気を失う者もできた。

こうなると、土地の者も見捨てては置かれないので、大勢が稲をになつて来てその四方に積んだ。最初のうちは象も知らぬ顔をしていたが、だんだんにたくさん運ばれて、自分

たちの食うには十分であることを見きわめた時に、かれらは初めて囲みを解いて、その稲を盛んに食いはじめた。かれらは太守の一行を人質ひとじちにして、自分たちの食料を強要したのである。

野獸の智、まことに及ぶべからずと、人びとは舌をまいた。

### 碧瀾堂

南康なんこうの建昌けんしょう県の某家では紫姑神しこじんを祭っていたが、その神には甚だ靈異があつて、何かにつけて伺いを立てると、直ちに有難いお告げをあたえられた。たとえば長江の下流地方では茶の価が高くなっているから、早く持ち出して売れといい、どこでは米の相場が騰あがっているから、早く積み出してゆけというたぐいで、それが一々適中するために、その家は大いに工面くめんがよくなった。

ある日、又もや神のお告げがあつた。

「あしたは貴い客人が来る。かならず鄭重に取扱わなければならぬぞ」

そこで、家の息子たちや奉公人どもは早朝から門に立って待ち受けていたが、日の暮れ

る頃まで誰も来なかつた。

神様のお告げにいつわりがあるうとは思われないが、是非なく門を閉じようとする時、ひとりの乞食が物を貰いに来た。

「さあ、これだ」

無理に内へ連れ込んで、湯に入れるやら、着物を着せ換えるやら、家内が総がかりで下へも置かない<sup>もてなし</sup>歡待に、乞食は面食らつた。嬉しいのを通り越して、かれは怖ろしくなつた。もしや自分を<sup>いけにえ</sup>生贄にして何かの神を祭るのではないかとも疑つた。

「どうぞお助けください。わたくしのような者でも命は惜しゆうございます」と、かれは泣いて訴えた。

主人から神のお告げを言い聞かされて、乞食も不思議そうに言つた。

「それではお<sup>いの</sup>禱りをして、わたくしからその子細を伺つてみましょう」  
香を焚いて禱ると、やがて神はくだつた。

神は捧げられた紙の上に、左の文字を大きく書いた。

「あなたは<sup>へきらんどう</sup>碧瀾堂の昔を忘れましたか」

それを見ると、乞食はあつと気を失つてしまった。家内の人びともおどろいて介抱して、

さてその子細を詮議すると、かれは泣いて答えた。

「わたくしも元は相当の金持の家のせがれで、ある娼妓しょうぎと深く言いかわしましたが、両親がとても添わせてくれる筈はないので、女をつれて駈落ちをしました。そのうちに貯えの金はなくなる、女はいつまでも付きまとっている。どうにも仕様がなないので、呉興ごこうへ行ったときに、碧瀾堂へ遊びに行こうといつて連れ出して、酒に酔った勢いで女を水へ突き落して逃げましたが、その後にもやはりよいこともなくて、とうとう乞食の群れに落ちちゃいました。今日こんにちわたくしがここへ呼び込まれましたのは、死んだ女がむかしの恨みを言おうがためでございましたらう」

言い終つて、彼はまた泣いた。

その家では数百金をあたえて彼を帰してやった。そうして、その以後は神を祭らなくなつたそうである。

## 雨夜の怪

後に 尚書しょうしょに立身した 呂安老りょあんろうという人は、若いときに蔡州さいしゅうの学堂にはいつていた。



ある日同じ寄宿舎にいる学生七、八人と夕方から宿舎をぬけ出して、そこらを遊びまわつて、夜なかに帰つて来ると、にわかしゅううに驟雨しゅううがざつと降り出した。

かれらは雨具を持つていなかった。しかもこの当時は学堂の制度がはなはだ嚴重で、無断外泊などは決して許されないので、かれらは引返して酒屋へ行つて、単衣ひとえの衾よぎを借りた。その衾の四隅を竹でささえて、大勢がその下へはいつて駈けて来ると、学堂の牆かきに近づいた頃に、夜廻りの者が松たいまつ明たいまつを持つて、火の用心を呼びながら来たので、これに見付けられては大変だと思つて、かれらは俄かに立ちすくんだ。双方相距さきること二十余歩、夜廻りの者は俄かに引返して、あとをも見ずに走り去つたので、かれらはその間に牆を乗り越えてはいったが、内心びくびくしていた。おそらく無断外出を夜廻りに見付けられて、譴責けんせきを受けるか、退学を命ぜられるかと、その夜は碌々眠られなかった。

その明るる日である。夜廻りの邏卒らそつが府庁に出て申し立てた。

「昨夜の二更にこう、大雨の最中に、しかじかの処を廻つて居りますと、忽ちに一つの怪物が北の方角から参りました。上は四角で平らで、蓆むしろのようで、模糊もことして判りません。その下にはおよそ二、三十の足のような物がありまして、人のようにぞろぞろと歩いて参りました、学校の牆のあたりへ来て消え失せました」

その報告におどろいた郡守以下の役人らは、それがいかなる怪物であるか、ほとんど想像が付かなかつた。その噂がそれからそれへと拡まって、何か巨大な怪物がここらに出現するという風説が騒がしくなつた。

町々では厄払いの道場を設けて、三昼夜の祈祷をおこない、その怪物の絵姿をかいて神社の前で磔刑はりつけにした。

世の怪談にはこの類が少くない。

### 術くらべ

鼎州ていしゅうの開元寺かいげんじには寓居の客が多かつた。ある夏の日、その客の五、六人が寺の門前に出ていると、ひとりの女が水を汲みに来た。

客の一人は幻術をよくするので、たわむれに彼女を悩まそうとして、なにかの術をおこなうと、女の提げている水桶が動かなくなつた。

「みなさん、御冗談をなすつてはいけません」と、女は見かえつた。

客は黙つていて術を解かなかつた。暫くして女は言った。

「それでは術くらべだ」

彼女は荷にないの棒を投げ出すと、それがたちまちに小さい蛇となった。客はふところから粉こなの固まりのような物を取り出して、地面に二十あまりの輪を描いて、自分はそのまん中に立った。蛇は進んで来たが、その輪にささえられて入ることが出来ない。それを見て、女は水をふくんで吹きかけると、蛇は以前よりも大きくなった。

「旦那、もう冗談はおやめなさい」と、彼女はまた言った。

客は自じ若じやくとして答えなかった。蛇はたちまち突入して、第十五の輪まで進んで来た。女は再び水をふくんで吹きかけると、蛇は椽たるきのような大蛇となって、まん中の輪にはいった。ここで女は再びやめろと言ったが、客は肯きかなかつた。蛇はどうとう客の足から身体にまき付いて、頭の上にまで登って行った。

往來の人も大勢立ちどまって見物する。寺の者もおどろいた。ある者は役所へ訴え出ようとする。女は笑った。

「心配することはありません」

その蛇を掴んで地に投げつけると、忽ち元の棒となった。彼女はまた笑った。

「おまえの術はまだ未熟なのに、なぜそんな事をするのだ。わたしだからいいが、他人に

逢えばきつと殺される」

客は後悔してあやまった。彼は女の家へ付いて行って、その弟子になったという。

### 渡頭の妖

邵武しやうぶの溪河たにがわの北に怪しい男が棲んでいて、夜になると河ばたに出て来た。そうして徒渉からわたりの者を見ると、必ずそれを背負つて南へ渡した。ある人がその子細を訊くと、彼は答えた。

「これは私の発願ほつがんで、別に子細はありません」

ここに黄敦立こうとんりゆうという胆勇の男があつて、彼は何かの害をなす者であろうと疑つた。そこで、試みに毎晩出てゆくと、かの男はいつものように彼を背負つて渡つた。三日の後、黄は彼に言った。

「人間の礼儀はお互いという。わたしはいつもお前に渡してもらうから、今夜は私がおまえを渡してあげよう」

男は辞退したが、黄は肯きかなかつた。

無理に彼をいだいて河を渡ると、むこう岸には大きい石があつた。黄はあらかじめ家僕しもべに言い付けて、その石の上に草をたばねて置いたのである。黄は抱いている男を大石に叩きつけると、男は悲鳴をあげて助けを求めた。灯ひに照らして見ると、彼は青面せいめんの大きいかくな※猿えんにかくな変じていた。打ち殺してそれを火に燔やくと、その臭気が数里にきこえた。

その後、ここに怪しいことはなかつた。



# 青空文庫情報

底本：「中国怪奇小説集」光文社文庫、光文社

1994（平成6）年4月20日初版1刷発行

入力：tatsuki

校正：kazuishhi

2003年7月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 中国怪奇小説集

## 夷堅志

2020年 7月17日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>